

# 橋の画像目録・網野善彦編資料

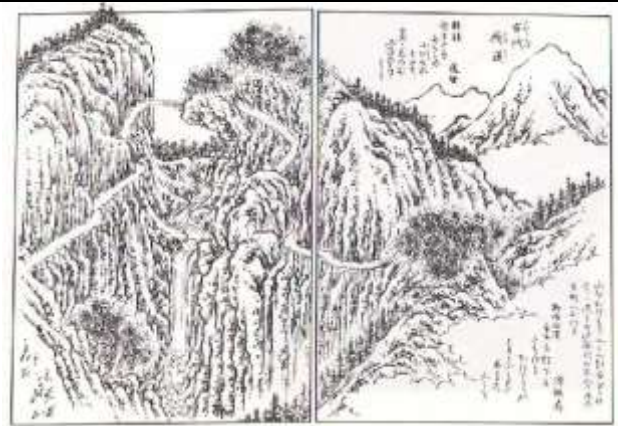
## 天の橋地の橋(福音館書店)より

(Amino.pdf)

以下の画像は、筆者島田が名古屋大学に網野教授とともに在籍していた頃に、橋梁工学の教育資料として利用することのお許しを得てまとめたものです。他の資料と重複して紹介した画像も多く含みます。



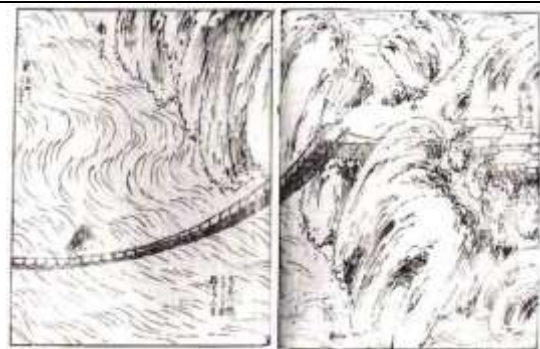
AMN01: 亀の橋:「善悪報はなし」の挿し絵より:ある海辺で、子供が亀を打ち殺そうとしていた。そこへ通りかかったある人が、亀を助けて海へ離してやった。それからしばらくしたあるとき、その人が商用で船にのったが、折悪しく風のために船が転覆し、船頭をはじめすべての人々が死んでしまった。しかし、その人だけは海の上を平地をゆくようにして浜辺にたどりついて助かった。見ると、何千万もの亀がよりそってその人を助けるように橋を作った、というお話。



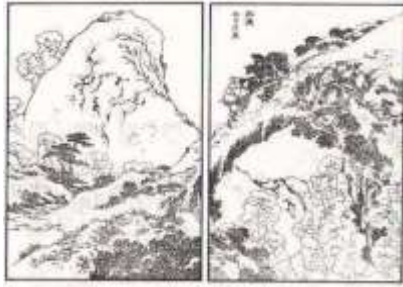
AMN02: 御坂峠の懸け橋:「信濃奇勝録」に描かれた懸け橋(東京都立中央図書館)  
信濃、今の長野県は、山が高く谷も深い交通の難所が多い。御坂峠の懸け橋は、難所でもあり、また景色の良い場所にある、という絵で、歌にも詠まれている。:



AMN03: 甲斐の猿橋:「廻国雑記」の説明は、甲州、今の山梨県に、猿が架けたと言い伝えられる橋がある。真偽のほどは別として、この橋がこわれると、国中の猿飼いたちが集まって、勧進などして費用を作って架け替えるという。現在も修復して存在している。:



AMN04: 飛騨の藤橋: 藤蔓を編んだ飛騨の藤橋の図(東京都立中央図書館):「閑田耕筆」に紹介された藤橋の図であって、飛騨、岐阜県北部には、三カ所ほどの藤橋があつて、毎年近県の人が集まって作り直すと言う。材料は藤蔓で、長さ33間、約60メートルを吊橋のように渡してある、と紹介されている。



AMN05:天然の橋:肥後五カ所の庄(北斎漫画より)に描かれているもの。肥後は、今の熊本県。:



AMN06:舟橋:広重画「木曾街道六十九次之内武佐」(東京国立博物館):簡単な舟橋の構造が具体的に解る。



AMN07:舟橋:北斎画「諸国名橋奇覧—上野佐野舟橋の古図」(神奈川県立博物館)  
舟橋としては、かなり規模の大きい構造であって、路面が板敷きで人馬の通行が十分にできる様子が描かれている。



AMN08:甲斐の猿橋:広重画「甲陽猿橋之図」(東京国立博物館):猿橋は、構造力学的には片持ち梁、つまり、せりだし梁である。橋の材料が木材であるので、橋のたもとの構造が興味深い。ただし、これは誇張した絵になっている。



AMN09:飛越の堺吊橋:北斎画「諸国名橋奇覧—飛越の堺吊橋」(神奈川県立博物館):飛騨(岐阜県の北部)と越中(富山県)との堺にあった吊橋の図である。やや非現実的な構造に見えるが、構造的には非剛性の吊橋をしている。このような構造が実現できたかどうかは怪しい。



AMN10:神通川の舟橋:「越中神通川船橋図」(富山市郷土博物館):富山県の神通川は、水量が多く、かなりの急流である。昔の橋梁技術では、強固な橋脚の建設は無理であったろう。舟橋は最も合理的な選択であったろう。長さ四丁(約400メートル)の河幅を、大船64艘を鎖二筋で連結した、と説明されている。



AMN11: 神橋: 和歌山県天野の丹生郡比売神社の反り橋: 神社に象徴的に建設される太鼓橋の中でも規模が大きい。朱色に塗るのが神橋の特徴。



AMN12: 階段: 「仏伝図」より従三十三天降下の部分(久遠寺): 神道や仏教において、天と地とを結ぶ通路に、橋のほか、はしごや階段が象徴的に描かれる。神聖な構造は朱色の塗るのが日本の習慣。



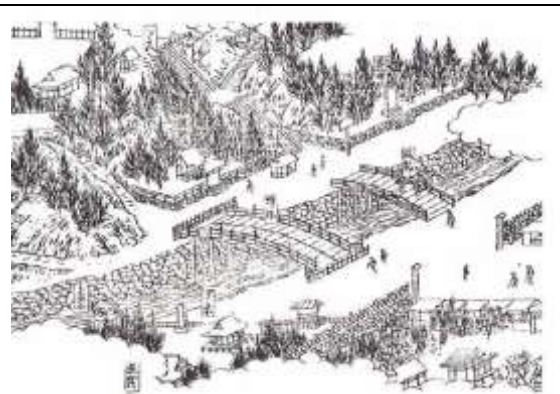
AMN13: 石橋: 狩野元信「釈迦堂縁起」(清涼寺): 自然にできた石の橋を、お釈迦さまが僧を背負ってわたるのを描いたもの。



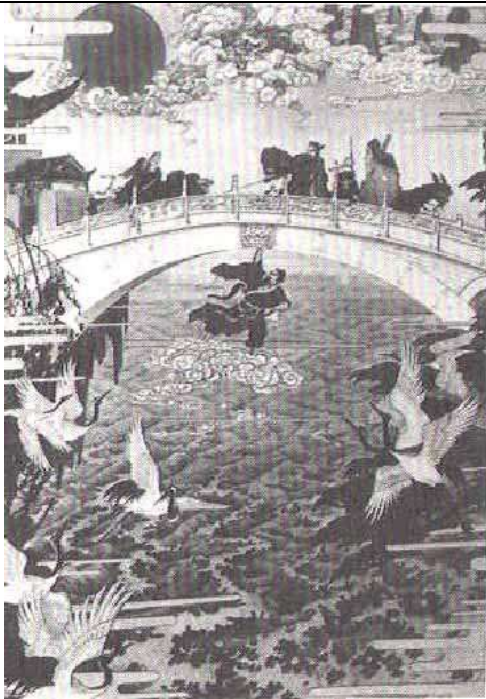
AMN14: 浮き橋: 浮橋の舞で用いる橋の模型: 埼玉県鷲宮町につたわる土師一流催馬楽神楽の写真。ここでは天の浮き橋を象徴するアーチ型の橋のモデルが用いられている。



AMN15: 橋の景観図: 北斎画「百橋一覽図」(太田記念美術館): 近代以前に、どのような形式の橋が架けられていたのかを描いた図として興味がある。図の中央にある橋は、アーチと、三角トラスと、猿橋のような張りだし形式のものとの組み合わせであって、現実にこのような形式があったとすると、かなりの大工事であったろう。



AMN16: 日光の神橋: 木曾路名所図会(東洋文庫): 日光中禅寺湖に水源を持つ大谷川に架かる橋で、竜宮につながる蛇の橋と言われる。勝道上人が日光山にはじめてのぼったとき、深砂大王が青赤二匹の蛇をはなつて橋とした。朱塗りの神橋は、一般人は渡らせず、仮橋の方を渡る。



AMN17: 魯班の橋: 伝説を題材にした正月絵: 約千三百年前の中国で、隋の時代の名工魯班が石のアーチ橋を欒州に架けた橋の伝説であって、太陽や月や星や山がわたってもびくともしなかった、という。



AMN18: 山崎橋: 山崎架橋図(和泉市久保惣記念美術館): 淀川に架かる山崎橋は、行基菩薩が架けたが、何度も流された。平安時代に架け直されたときの物語りを鎌倉時代に絵にしたものである。この絵の中には、行基菩薩にまつわる種々の伝説を象徴的に描いてあるので、絵解き(絵の解説)が下に付けられている。



AMN19: 水内曲橋: 信濃奇勝録より(東京都中央図書館): 信州、いまの長野県の犀川は非常な急流で人馬の交通に障害があったが、ここに高坂覚法入道が橋を架けた。その景観が非常に優美であったという。



AMN20: 不明橋: 粉河寺縁起絵巻(粉河寺): 橋の建設は、費用を勧進でまかなうことが多く、僧侶が橋の維持管理をすることが多かった。そのことから、寺を建設することのきっかけ(縁起)に橋の話があり、それが記録や絵巻に表れる。



AMN21: 神橋: 称名寺(神奈川県金沢区)の橋供養: 橋が完成したときに行なわれる橋供養の一つの例を示した写真。ここにある橋は朱色に塗られ、実用というよりも象徴的な目的で建設されたもの。



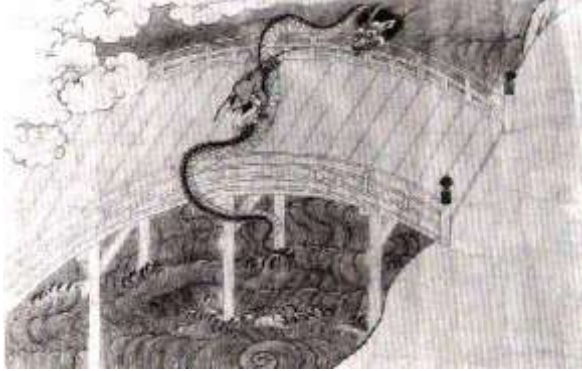
AMN22: 両国橋: 国芳画「両国橋渡初之図」東京都立中央図書館: 親・子・孫とつづく三代の夫婦を先頭に、初めて橋を渡る儀式は、現代でも行なわれる。この図は、安政年間の両国橋架けかえのときの儀式を描いたもの。



AMN23: 不明橋: 口合名尽児遊の図版: 橋の下に菖蒲(しょうぶ)が植えてあるのは、虎に竹藪を配置するように、一つの約束ごとになっていたようであるが、その理由や出所は不明である。この図は、わらべうたの挿し絵である。



AMN24: 神橋: 太鼓橋の構造: 神社や寺院には太鼓橋が架かっていることが多い。この宗教的な意味は、聖なる敷地と俗界とを隔てる池や川を渡す。通常の人馬の通行を考えないので、傾斜がきつい。橋の路面は、滑り止めがついている。



AMN25: 勢多の橋: 依の藤太絵巻に描かれた橋(黒谷金戒光明寺): 依藤太(たわらのとうた)の武勇伝を絵巻に描いたもの。この橋は勢多の橋(現在では瀬田橋のところ)に大蛇が住みついていたが、それを恐れずに渡ったことを描いた絵巻。



AMN26: 不明橋: 室町絵巻「浄瑠璃物語」の橋懸かりの図: 牛若丸が、矢矧の里の浄瑠璃御前を見染め、姫に逢うために橋を渡る場面の図。



AMN27: 自然橋: 酒吞童子図(東京国立博物館): 源の頼光が、大江山も酒吞童子を征伐するため、山に分け入ったときの物語りを絵に描いたものの一つ。神の化身の老人が、楠の大木を引き抜いて橋を渡してくれたことを絵図に描いたもの。



AMN28: 不明橋: 彦火々出見尊絵巻に見える懸け橋(明通寺): 彦火々出見尊(ひこほほでみのみこと)とは、神話にでてくる海幸彦と山幸彦のことであって、山幸彦が釣り針を探しにいったことが縁で、竜宮の姫と結婚した。王子の出産のため、竜宮から浜辺に橋を架け、産屋を作ったという伝説を描いたもの。



AMN29: 不明橋: 広重画「木曾路の山川」(東京国立博物館): 日本の山水画の中では、よく、橋がその山水画の世界への入り口になっており、また、出口にもなっている。もちろん、実際に存在しない想像の世界である。



AMN30: 布橋: 立山曼陀羅(来迎寺): 富山の立山は古くから霊山として信仰されてきたが、その信仰を全国にひろめるため、山麓の衆徒が絵解きに使ったもの。ここでの橋は布橋(ぬのばし)と呼ばれ、天界と人界との境界を象徴的に表している。



AMN31: 神橋: 九品仏二十五菩薩来迎会の行事の写真: 東京世田谷の浄真寺、通称九品仏(くほんぶつ)で三年に一回行なわれる来迎会では、現世と浄土とを結ぶ象徴的な木の橋をかけ、信者が菩薩の面をかぶってこの橋を渡る。



AMN32: 宇治橋: 柳橋図屏風(香雪美術館)その1: 京都の南にある宇治橋は、日本の歴史の中で数々の舞台を演じている。したがって、宇治橋を描いた美術品が多い。ここでの題材は柳(と水車)である。



AMN33: 宇治橋: 柳橋図屏風(香雪美術館)その2: 京都の南にある宇治橋は、日本の歴史の中で数々の舞台を演じている。したがって、宇治橋を描いた美術品が多い。ここでの題材は柳と水車である。



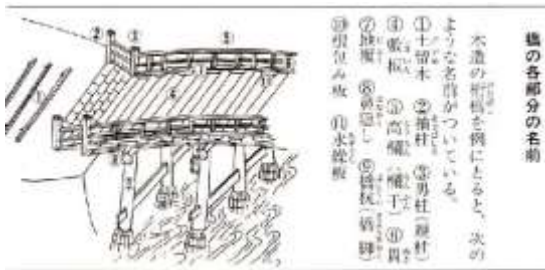
AMN34: 扇面歌意絵画卷(根津美術館蔵): 絵をかく画面として最小の単位であって、そのなかにありとあらゆるものがかきこまれる。



AMN35: 勢多橋: 宇治橋: 石山寺縁起絵巻(石山寺): 石山寺は、琵琶湖から流れ出る瀬田川の右岸にある。宇治川はこの下流で、上流に瀬田の橋、下流に宇治橋がある。二つの橋を舞台にした絵巻。



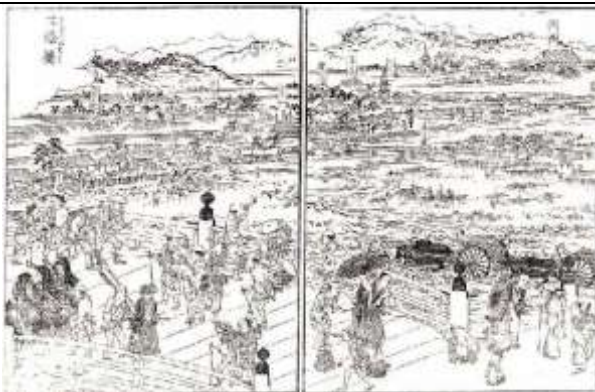
AMN36: 不明橋: 伊勢新名所絵歌合にある打ち橋(神宮徴古館農業館): 最も単純な打ち橋の絵。打ち橋とは掛け外しが簡単にできる構造の橋。



AMN37: 橋の各部分の名前



AMN38: 不明橋: 打ち橋: 「法輪寺参詣曼陀羅」(法輪寺): 川は人生における障害の象徴的な存在であるので、川に橋を架けることは、宗教的に大きな意義がある。法輪寺の聖域に参詣するには、橋を渡るという儀式が必要である。



AMN39: 三条大橋: 伊勢名所図会(東洋文庫): 京都三条大橋を描いたもの



AMN40: 長崎・眼鏡橋。寛永 11 年(1634)、中国の僧如定によって架けられたといわれる。なお、熊本県矢部町の通潤橋は、安政元年(1854)に石工岩永三五郎とその弟子によって架けられた。



AMN41: 呉橋: 宇佐神宮(大分県宇佐市)の神橋。屋根つきの橋は、日本では珍しい。



AMN42: 橋舞台: 「芦の葉風」の中の「浪花江南雪景色」(大阪府立中之島図書館): 役者絵で、浪花の役者が橋の上にせいぞろいしている。日本の芸能では、橋は一つの舞台としてよく使われる



AMN43: 橋屏風絵: 柳橋扇面流屏風(大阪市立美術館): 川は水神がいる、または竜神がいる、という伝説はごく普通にあり、扇は神へのささげものであった。



AMN44: 不明橋: 反り橋: 清明上河図(北京故宮博物院): 中国では、反り橋は、町の中のごくふつうの橋であった。庶民の生活の場の中心として、雑多な状況が描かれている。日本の反り橋が神聖な、特別の橋であるのと対象的である。

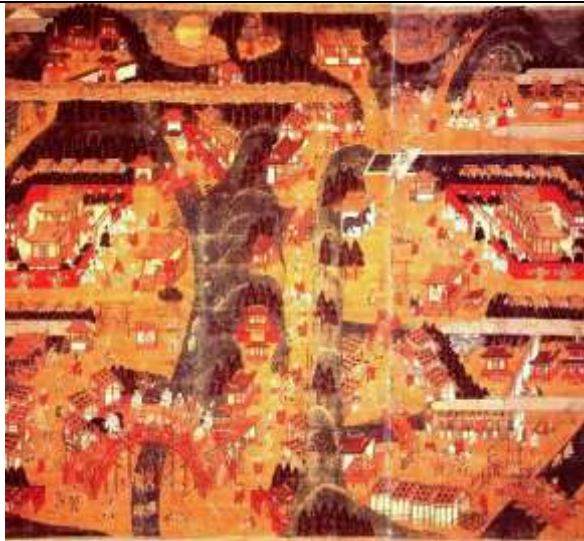


AMN45: 不明橋: 反り橋: 伊勢参詣曼陀羅の橋の部分(神宮徴古館農業館): 図の描き方が、幾何学的に正しくないが、象徴的な表現になっている。



AMN46: 神橋: 住吉大社の反り橋: 日本文化の象徴的な、最も典型的な赤い反り橋





AMN47: 伊勢参宮の橋: 伊勢参詣曼陀羅(神宮徴古館農業館): 日本のもっとも代表的な神社、伊勢神宮への参詣図。右下の船橋に始まって、幾つかの橋を渡って、内宮に入る。



AMN48: 石橋: 国東半島天然寺: お寺は、修業のため、山の奥に建てられることも多い。当然、その場所は不便であり、橋を架け、そこを渡るということに信仰上の意義を持たせられるのであろう。



AMN49: 神橋: 住吉祭礼図屏風: 住吉神社の祭礼を描いた屏風。橋の上を神輿が渡っているのが中央に見える。橋の色は、赤に塗られていないことに注意する。



AMN50: ターナーが描いたアンデルマットの悪魔の橋。中世ヨーロッパの各地に橋を造ったのは架橋騎士団と呼ばれる修道僧の集団だった。神の助力なしに、こんな所に橋を架けることができるのは悪魔以外にないと考えられたことからこの呼び名ができた。



AMN51: アンデルマットの悪魔の橋(スイス)。岩をぶちぬいて上に架かるのは新悪魔の橋。伝説が赤色で岩に描かれている。



AMN52: 両国橋: 豊春画「両国橋図」(フリーヤ美術館): 江戸の下町の情景を、両国橋を中心に描いている。



AMN53: 宇治橋: 橋の大和絵: 平家物語絵巻 (林原美術館): 橋は、時代と場所を問わず、戦争のときの重要な戦場になる。平家物語りのなかで、橋合戦として伝えられた部分を描いたもの。橋板が外してある。



AMN54: 五条大橋: 絵巻「武蔵坊弁慶縁起」(チェスター・ビーティ図書館): 五条大橋の上の弁慶と牛若丸の物語りの挿し絵



AMN55: ドラム缶の浮き橋: 東京都奥多摩湖。



AMN56: 四条大橋: 上杉本による「洛中洛外図屏風」(米沢市教育委員会): ここに描かれた橋は四条の橋で、神輿は仮橋の方を渡っている。



AMN57: 宝来橋ほか: 円山応挙「淀川兩岸図巻」の部分その1 (アルカンシェル美術館): 日本の木造橋の景観をよく表す。宝来橋(右)、京橋(上)、金田橋(左)



AMN58: 天満橋: 円山応挙「淀川兩岸図巻」の部分その2 (アルカンシェル美術館): 日本の木造橋の景観をよく表す。天満橋の景観。

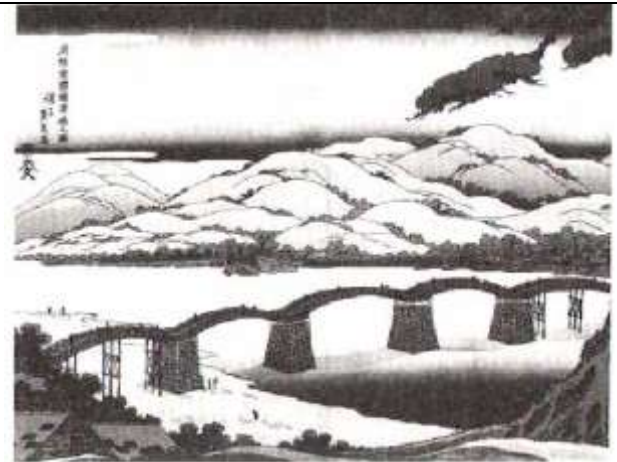


天満橋 京橋 錦帯橋 八つ橋 三河の八橋

AMN59: 天満橋: 円山応挙「淀川兩岸図巻」の部分その3(アルカンシェール美術館): 日本の木造橋の景観をよく表す。天満橋(右手前)、京橋(左奥)



AMN60: 高知県四万十川の潜橋。洪水になって水位が上がると水の下に潜ってしまう。水の抵抗が小さくなるように高欄がない。



AMN61: 錦帯橋: 溪斎英泉画「周防岩国錦帯橋之図」(東京国立博物館): 日本三名橋の一つとして、多くの絵画に描かれている。



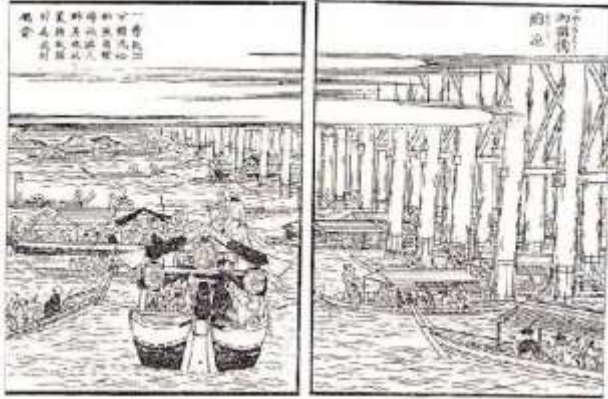
AMN62: 京橋: 広重画「名所江戸百景京橋竹がし」(太田記念美術館)江戸時代、竹は種々の工芸品の重要な材料であった。竹の集積場所の河岸を描いたもの。



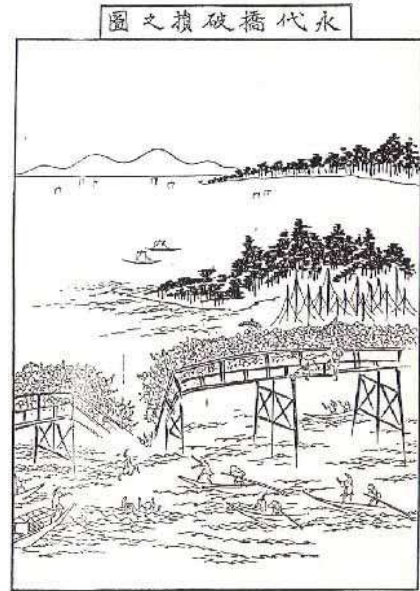
AMN63: 八つ橋: 岡山後楽園の八橋: 庭園の構成として作られる。



AMN64: 八つ橋: 北斎「諸国名橋奇覧、三河の八橋の古図」(神奈川県立博物館): 最初に有名になった八つ橋がどこにあったかは判らなくなっている。



AMN65: 両国橋: 長谷川雪旦画「江戸名所花暦」両国橋納涼: 隅田川の上で、夏の納涼に船の賑わいを描いたもので、橋は橋脚だけが描かれている。



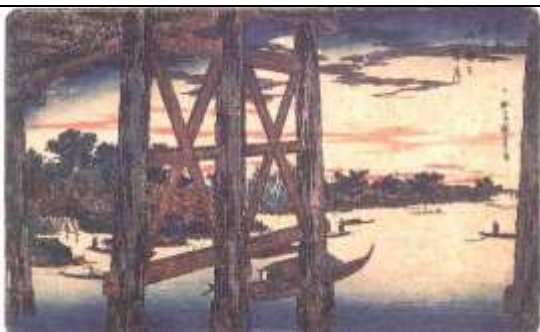
AMN66: 永代橋: 「夢の浮き橋」より永代橋破損の図: 橋が人の重量で落橋した事故を描いたものとして価値がある。



AMN67: 両国橋: 広重画「名所江戸百景、大はしあたけの夕立」(東京国立博物館): 浮世絵の作風として、雨を描いて秀逸。



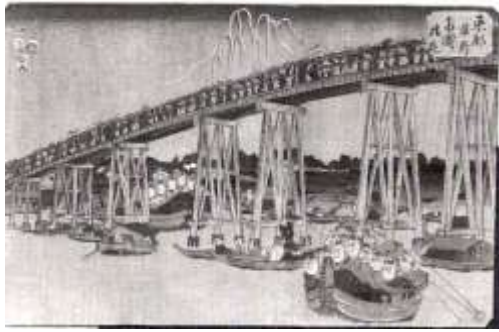
AMN68: 両国橋: 北斎画「富嶽三十六景、御厩川岸より両国橋夕陽見」(メトロポリタン美術館) 富士山を遠景とし、厩橋(うまやばし)側から見た両国橋を中景としたもの、画の主題は渡し船の情景を描いたもの。



AMN69: 両国橋: 広重画「東都名所、両国之宵月」(東京国立博物館): 橋を下から見上げた構図であるので、橋脚の構造が解る。橋を主題に置いた新しい風景画を作り出した。



AMN70: 両国橋: 広重画「名所江戸百景、両国花火」部分(東京国立博物館): 隅田川の川開きと打ち上げ花火は、江戸の庶民のリクリエーションであり、現在も続けられている。



AMN71: 両国橋: 広重画「東都名所、両国橋夜」(メトロポリタン美術館): 夏の夕涼みに舟遊びをするのは、当時としても贅沢な遊びで、庶民は橋の上か、岸辺にいて花火見物をした。



AMN72: 日本橋: 北斎画「富嶽三十六景、江戸日本橋」(メトロポリタン美術館): ここでの日本橋は、擬宝珠(ぎぼし)がちらっと見えるだけ。橋の上の賑わいを部分的に描いた。



AMN73: 日本橋: 溪斎英泉画「日本橋の晴嵐」(メトロポリタン美術館): 日本橋の賑わいを描いたもので、橋は高欄が部分的に見えるだけ。



AMN74: 日本橋: 広重画「東海道五十三次、日本橋」朝と昼: 広重は同じ構図にちよつとてを加え、朝(東京国立博物館)と、昼(メトロポリタン美術館)のふたつの日本橋図を作った。



AMN75: 日本橋: 広重画「東都名所、日本橋白雨」(太田記念美術館): 西洋画には、雨を描いたものは少ない。笠や雨傘が描かれているのは、欧米ではエキゾチックに感じられるようである。



AMN76: 万年橋: 広重画「名所江戸百景、深川万年橋」(メトロポリタン美術館): 画の視点は橋桁を通して富士山を遠景とした構図である。「鶴は千年、亀は万年生きる」と言う言い伝えに基づいて、亀の画を加えて万年橋の象徴としたもの。風景画と言うよりも、判じ画と言うものに近い。



AMN77: 万年橋: 北斎画「富嶽三十六景、深川万年橋下」(東京国立博物館): 遠景に富士山を入れ、橋を主題とした版画であって、名所図の典型。



AMN78: 太鼓橋: 広重画「名所江戸百景、亀戸天神境内」(神奈川県立博物館): 天神さまの境内の、池に架かる象徴的な太鼓橋。これは赤に塗っていないので、参詣人がいつでも通行できるもの。藤だなど松とが、日本の神社庭園に重要な構成をなしている。



AMN79: 太鼓橋: 北斎画「諸国名橋奇覧、亀戸天神太鼓橋」(神奈川県立博物館): 太鼓橋は、実用というよりも奇をてらったところがある。橋の上で、こわごと下を眺めている人を描いてある。